

音楽ストリーミングサービスの利用が音楽的多様性に与える影響 —利用頻度と聴取スタイルに着目した実証分析—

情 22-0373 野口 千皓
指導教員 宋 財法

はじめに

日本の音楽配信市場は、2023 年にその約 90%をストリーミングが占めるに至っている。膨大な楽曲へのアクセスやレコメンド機能は未知の音楽との出会いを増やす一方で、好みの似た楽曲に偏る「フィルターバブル」のリスクも懸念されている。本研究は、利用頻度という量的側面と、聴取スタイル（能動・受動）という質的側面が個人の音楽的多様性に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

先行研究

先行研究では、ストリーミングが多様性を促進するという視点と、アルゴリズムが多様性を制限するという視点が対立してきた。Datta ら (2018) は探索コストの低下による多様性拡大を実証したが、Anderson ら (2020) は受動的視聴が多様性を低下させる傾向を指摘している。しかし、これらの多くは客観的なログデータに依存しており、ユーザーの主観的な認識を捉えきれていない。そこで本研究は、世論調査を通じてユーザーの主観的な利用実態を分析し、先行研究の空白を埋める点に意義を持つ。

理論・仮説

本研究では、金銭的リスクの排除による選択の促進と学習効果による受容性の向上に基づき、ストリーミング利用頻度が高いほど多様性が高まるという仮説 1 を考えた。また、アルゴリズムによる選曲（受動的視聴）は安全な楽曲提示に偏りやすく、フィルターバブルに陥りやすいとの仮定から、受動的視聴よりも能動的視聴を行うユーザーの方が、多様性が高いという仮説 2 を設定した。

データと分析方法

分析には、2025 年 10 月に実施したインターネット調査の回答データ（有効サンプル 2,009 名）を用いた。応答変数を「聴取ジャンル数」とし、説明変数は利用頻度と利用スタイル（自作プレイリストかレコメンドか）に設定した。社会的属性（年齢、性別、世帯年収、職業）を統制した上で、重回帰分析によって各要因の純粋な効果を推定した。

分析結果

重回帰分析の結果、利用頻度の係数は $0.534 (p < 0.001)$ と統計的に有意な正の値を示し、

仮説 1 は支持された（表 1）。一方、仮説 2 については、t 検定では能動的視聴群の多様性が有意に高かったものの（ $p = 0.037$ ）、回答者の属性を統制した重回帰分析（表 2）では統計的有意な関係は確認できなかった（ $p = 0.121$ ）。これは、利用スタイルの違い自体が多様性を決定づける主要因ではないことを示しており、仮説 2 は支持されなかった。

表 1. 仮説 1 の推定結果

	係数	p 値
切片	0.822	(<0.001)
ストリーミング利用頻度	0.534	(<0.001)
Num.Obs.		1281
R ²		0.292
R ² Adj.		0.285

表 2. 仮説 2 の推定結果

	係数	p 値
切片	2.255	(<0.001)
自作プレイリストの利用	0.188	(0.121)
Num.Obs.		1281
R ²		0.292
R ² Adj.		0.285

おわりに

本研究の結果、ストリーミングの利用頻度が高いほど音楽的多様性が高まることが明らかとなり（仮説 1 の支持）、これは先行研究とも整合する結果であった。一方で、属性を統制した分析では聴取スタイルの有意な影響は見られず、利用スタイルの違いが多様性を決定づける主要因ではないことが示唆された（仮説 2 の棄却）。今後の課題として、因果関係の方向性の精査や質的な多様性指標の導入、およびサンプルが不足した若年層に特化した詳細な調査が求められる。

参考文献

- Hannes Datta, George Knox, Bart J. Bronnenberg. 2018. “Changing Their Tune: How Consumers' Adoption of Online Streaming Affects Music Consumption and Discovery.” Working paper.
- Ashton Anderson, Lucas Maystre, Rishabh Mehrotra, Ian Anderson, Mounia Lalmas. 2020. “Algorithmic Effects on the Diversity of Consumption on Spotify.” WWW '20: Proceedings of The Web Conference 2020, pp. 2155-21.